

4. きらめく動物たちの命と海 【久保田信の白浜だより(その21)】

白浜では珍しいカミクラゲ

カミクラゲは8カ所に束ねられた触手を傘の縁からなびかせ、海表面直下まで浮かん

できたかと思えば、海底の方へと静かに沈んでゆきながら上下運動を繰り返す。毛髪のような多数の触手の根元には赤い眼が1個ずつあって、光を感知して浮沈を調節している。この目の中にはレンズは含まれておらず、立方クラゲ類やタコ・イカ類、はたまた人間のように像を結べるような高級で精巧な目ではない。

2004年2月に、今回はごく少数個体だったが、カミクラゲ（ヒドロ虫類）と久々に瀬戸漁港で遭遇できた（図）。白浜近海には、この10年余りではめったに姿を見かけない種で、これまで北浜（漂着個体）と瀬戸漁港で1個体ずつだけ見つかった。

カミクラゲも前に紹介したノーベル賞でよく知られたオワンクラゲと同様に、最大級のヒドロクラゲである。成体が子供の握りこぶしほどで、縦長の傘は、高さが10 cmに達する。軟クラゲ目のオワンクラゲが横長なのとは傘形が異なるが、これは両者の遊泳力の差につながっている。カミクラゲの方がすばやい動きができるのは、ジェット推進型体形なのと、何百もの赤い目の存在がものをいうからである。

2004年2月中旬のカミクラゲの記録は、この他には、元瀬戸臨海実験所教員の田名瀬英朋さんが南部町堺港で、同実験所の太田満技術職員と山本泰司技術職員が白浜町袋港で複数個体を見たとのことである。つまり同じ頃、白浜付近のあちこちで出現した。漁師さんたちによると、この年は冷水のため魚が捕れないので出漁できないとのことだった。

田辺湾のこの年の水温低下は確かで、元京都大学防災研究所白浜海象観測所の芹沢重厚教員に、田辺湾口に設定された日本一古い観測棟（2代目）で時々刻々と測定されている水温データの一部を教えて頂いた。2004年2月8日に最低水温を記録し、13℃を切ろうかという程度まで下がっていた。これ以上下がると熱帯系の魚類やタカラガイ類が凍死する。カミクラゲは紀伊水道北部の冷水が下り潮で一丸となってやってきたかもしれないとのことなので、それならばこのあたり一帯への出現は納得できる。

カミクラゲは日本各地で比較的頻繁に遭遇できる種であるにもかかわらず、世界の誰もそのポリプの姿を見たものはいない。実験室でもうまく得ることがまだできていない。たとえばカイヤドリヒドラクラゲのように、ポリプが他の動物と緊密な共生関係にあれば、実験室でいくら努力をしても自然条件がかなっていないのでポリプへの変態をおこさないだろう。こうなったら変態を促進させる薬を使ってポリプの実体をつきとめる手だてしか残されていないだろう。

カミクラゲは新種として1818年に記載されて以来、日本特産種であり続けてきた。だが、ごく最近、韓国でも発見された。北日本にはいないのに冷水系の隣国にも最近になって分布拡大したのだろうか。それとも元々いたのだろうか？生物地理学的な側面を突き詰

めることも面白い。

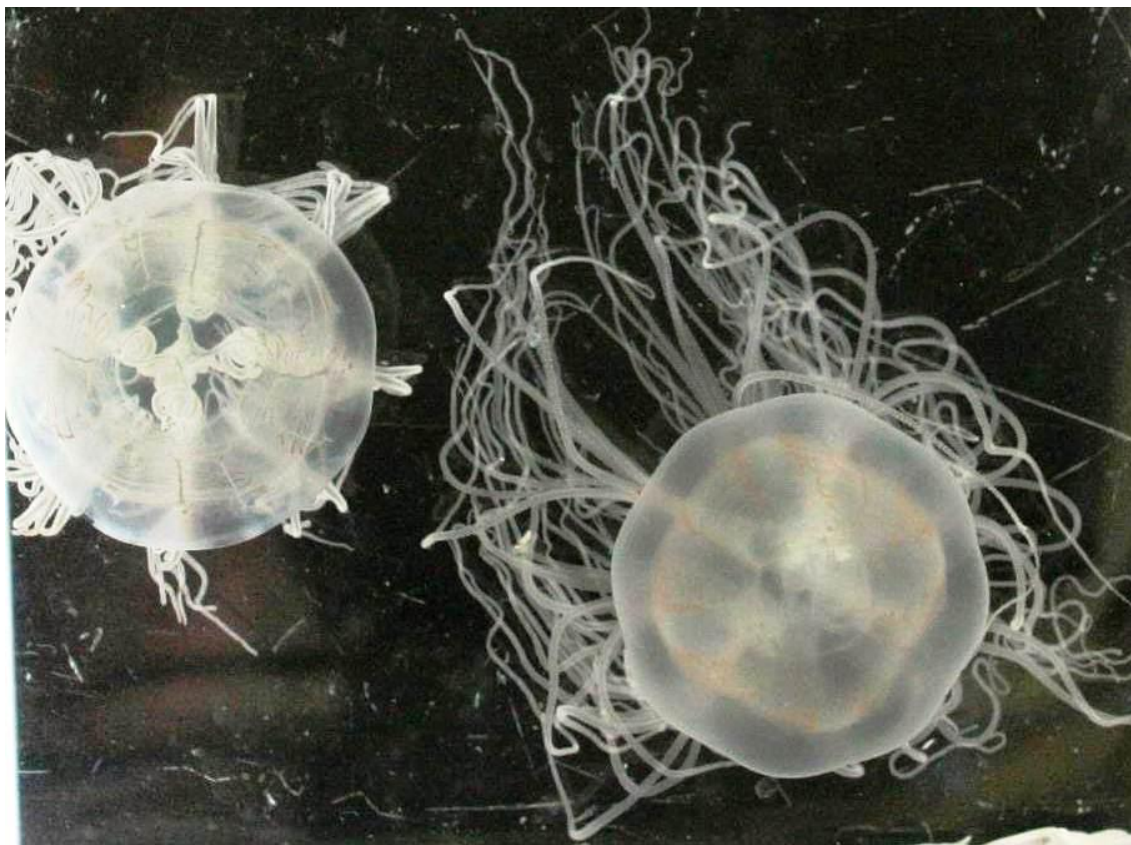


図. 髪をふりかざしたような大形のヒドロクラゲのカミクラゲ（左は口側から、右は反口側から観察）